

「フィリピンにおける囲郭居住システムが教えるもの」

研究期間 平成 28 年度

研究者名 西岡 誠 治

I. はじめに

フィリピンには、住宅地の周囲を塀で囲んでその出入り口にゲートを設けて管理する「囲郭居住システム（EHS：Exclusive Habitation System）」が多数存在する。西岡はフィリピン大学に勤務した 1993 年以降本件に関する研究に取り組み、1996 年に「フィリピンにおける囲郭居住システムの研究」として東京大学に提出し、博士（工学）を取得した。当該研究では、EHS の歴史や都市交通に与える影響とともに、世界の類例を調べてフィリピンとの共通項を解析したうえで、3 世紀半に及ぶスペイン支配に基づくカトリック文化がその成立に最も影響を与えていると結論づけている。

その後 20 年が経過して、後継研究が複数出るとともに関連書籍も出版されて来ている。それらをレビューするとともに改めて分布状況調査を実施し、当時の研究結果の現時点での見直しを先ず行う。そのうえで、EHS の現在のフィリピンと世界の中での意義づけを明らかにすることを目的としている。これによって、居住地の安全・安心に対する普遍的な政策提言を行えるのではないかと期待する。またこれらの研究成果は、フィリピンと同じくカトリック文化の影響を色濃く残す長崎の伝統的居住地形態を考える上でも、貴重な知見をもたらすものと考えた。

II. 研究内容と成果

1. 後継研究等のレビュー

1990 年代初頭に EHS の研究をスタートした時点では、当該施設に関連する書籍も先行研究も見出すことはできなかったが、その後、米国内で EHS を指す言葉であるゲेटッド・コミュニティ（GCs）が増大すると、関連する書籍や研究が次々となされるようになっていく。まず、それらのレビューを行うことが求められた。

（1）書籍購読

購読した書籍は、次の 5 冊の英語文献とそのうち 2 冊の和訳書である。

- 1) Evan McKenzie, "Privatopia: Homeowner Associations and the Rise of Residential Private Government", Yale University Press, 1994/5/25、及びその和訳（世界思想社、2002/12）
- 2) Edward J. Blakely, Mary Gail Snyder, "Fortress America: Gated Communities in the United States", Brookings Institution Press, 1997/7、及びその和訳（集文社、2004/06）
- 3) Setha Low, "Behind the Gates: Life, Security, and the Pursuit of Happiness in Fortress

America",Routledge, 2003/4/1

4) Edited by Rowland Atkinson & Sarah Blandy, "Gated Communities: International Perspectives ", Routledge , 2006/3/30

5) Edited by Samer Bagaen and Ola Uduku, "Gated Communities: Social Sustainability in Contemporary and Historical Gated Developments",Routledge; Reprint, 2012/12/7

これらを俯瞰すると、著者が 1990 年代に着目したフィリピンにおける EHS が、論文の結論としていたイスラム・カトリック文化の影響から切り離されて、自動車依存の郊外居住ライフスタイルの世界的な拡大とともに、米国における制度的な実験を踏まえて、国境の枠を超えて展開していった様子が見て取れる。

(2) 論文レビュー

日本国内においてフィリピンの EHS を取り扱った論文としては、以下がある。

- ① 西岡誠治「フィリピンにおける囲郭居住システムの研究」、東京大学博士論文、1996 年 6 月
- ② 西岡誠治「フィリピンにおける囲郭居住システムの成立に関する研究」、都市計画学会論文集 No.32 p517-522、1997 年 10 月
- ③ タナテ・ケネス「メトロ・マニラにおけるゲーテッド・コミュニティに関する研究」、筑波大学博士論文、2005 年 1 月
- ④ 河原真麻、土肥真人、杉田早苗「メトロ・マニラにおけるゲーテッド・コミュニティの実態に関する研究」、都市計画学会論文集 No.43-3、2008 年 10 月

②は①から EHS の成立に関する部分を深掘りして国内向けに発表したものであり、③は①を出発点にしなが、メトロ・マニラにおける EHS(GCs)の居住者の意識を調査したものである。さらに④では、メトロ・マニラにおける分布の傾向や開発・管理に着目し、その内部実態の把握に努めたものとなっている。これらの研究トレンドは、(1)の関連著作の傾向と同様に、EHS(GCs)の普及に合わせて、最初はその存立自体に着目していたものが、その制度背景や居住者の志向に着目したものへと変化している。

(3) 後継研究者へのアプローチ

上記後継研究の著者のうち、③の著者であるケネス・タナテ氏については、フィリピン競争委員会の課長という政府の要職にある。2017 年 1 月に、西岡がフィリピンを訪ねた際には、今後の西岡の研究に積極的に協力するとの意向確認を得ることができた。

論文⑤の代表執筆者の河原真麻氏は現在東京都に勤務しておられるが、年度末に連絡がつき、今後の研究展開において意見交換等で協力していただける目途が立った。

2. 海外事例調査

西岡が上記①の博士論文執筆に際して重要な位置を占めたのは、EHS の世界的な展開

状況を調べ、その存在の背景となる要因分析を行ったことであった。それから 20 年が経過して、世界的分布が拡大したことについては、多くの文献が指摘しているところであるが、それを定量的に把握することに今年度の研究の重点を置いた。

（1）在日在外公館アンケート調査

2016 年 10 月、我が国に存在する在外公館に EHS の存否を尋ねる調査を実施した。183 か国に和英の調査協力依頼とアンケート票を送付し、同封した返信用封筒で調査票の返送をお願いしたが、有効回収があった国は 23 か国に過ぎなかった。

（2）インターネット調査

2017 年 1 月にフィリピンに出向いて、フィリピン大学ディリマン校都市地域計画学部で都市交通・都市開発を専門にするモンタルボ准教授と上記結果について説明し、話し合ったところ、フィリピン国内での追加調査に協力してくれることとなった。

大学のスタッフを使って、インターネット上の各国の不動産サイト等を検索し、EHS の定義に該当するものにチェックしてもらったところ、1 月末までに 183 国中、95 か国でその存在を確認することができた。

（3）在フィリピン大使館電話アンケート調査

この段階では、88 か国における EHS の存否が明らかでなかったため、再度モンタルボ准教授に依頼して、フィリピンの首都マニラに所在する各国の大使館・領事館に電話による聞き取り調査等を行っていただいた。その結果、3 月末までに 30 か国で存在を、38 か国で不存在を確認することができた。20 か国では存否が判明しなかった。

3. フィリピン国内調査

（1）マニラ首都圏の EHS 分布展開

1993 年の終わり時点ではマニラ首都圏で 873 の EHS が存在し、住宅地開発全体に占める割合が 49%であった。フィリピン政府で住宅都市行政を所管する HLURB を訪問し、首都圏計画担当部長の Ms. Magdalena Vergara からデータ提供と助言を得た。それらに基づきマニラ首都圏内の EHS 総数の変遷を分析したところ、1994 年以降に開発された住宅地に占める EHS の割合が 90%超に達しており、EHS が一般化している実態が明らかになった。

（2）メトロ・マニラ以外の EHS

1994 年時点の調査においてメトロ・マニラ以外のフィリピンの主要都市においても EHS の有無の確認を行っている。その結果、フィリピンの南西部にあるパラワン島の Puetro Princesa、南端、ミンダナオ島の西南部地域にある Zamboanga、Cotabato の

3つの主要都市には EHS が存在しないという結果を得ていた。しかし約 20 年が経ち、Google マップやインターネット上の不動産情報等で確認した結果、これら 3 都市においても EHS が存在することが明らかになった。

4. 長崎へのフィードバック

EHS の背景として 1990 年代に関連性を見出したカトリック文化の影響が、長崎の潜伏期の街並みなどに影響を与えていないか否かを見出す取り組みも行った。

(1) 歴史文献購読

まずは長崎の歴史関連書を読むことから始めたが、次の 3 冊が参考になった。

- ① 瀬野精一郎ほか 4 名著『長崎県の歴史』山川出版、1998 年 9 月
- ② 永田信孝著『新・ながさき風土記』長崎出島文庫、1999 年 11 月
- ③ 後藤恵之輔著『新長崎ことはじめ』長崎文献社、2013 年 5 月

うち①は歴史を研究する 5 人の大学教官が長崎県の歴史について時代に沿って子細にかつ学術的に記述したもので、キリスト教潜伏期の人々の暮らしぶりや弾圧、街の発展の様子などが記述されている。また②は県立高校の教諭で有った著者が、長崎市の都市開発の進展を、その時々の産業と人口に着目して記述したものであり。地名の由来や平地の多くが埋め立て地であった点などに興味がそそられた。③は長崎大学の教授であった著者が、わが国で初めての長崎県内で発生した事象を、文化、交通、産業、食物、生活などに着目して記したものである。外国人居留地が長崎で初めて発生した点などに、EHS と長崎の関連性にヒントを見出すことができた。

(2) 集落形態の特徴

九州大学の高尾忠志准教授が、以前文化的景観の調査委員であった五島市で、仏教や神道の集落とカトリック系の集落について配置や形態について比較検討を試みたと聞き、その結果を確認したが、有意な差は発見できなかったという。

III. おわりに

二年計画の初年度の研究として、既往研究や文献のレビューとデータ収集を中心として取り組んだが、協力者に恵まれたこともあって、期待以上の成果を上げることができた。二年度目は、さらに内容を深めるとともに、それらを論文として取りまとめて発表することに取り組みたい。

今年度の成果を得るにあたってご協力いただいた、わが国及びフィリピン両国の研究者ほか、参考文献の執筆者、アンケートに回答して下さった在外公館関係者など、関係した全ての方々に、心より御礼申し上げたい。